



「おはようございます！モーニングロードの時間です」
「今朝の話題一位はなんといってもコチラですね！」

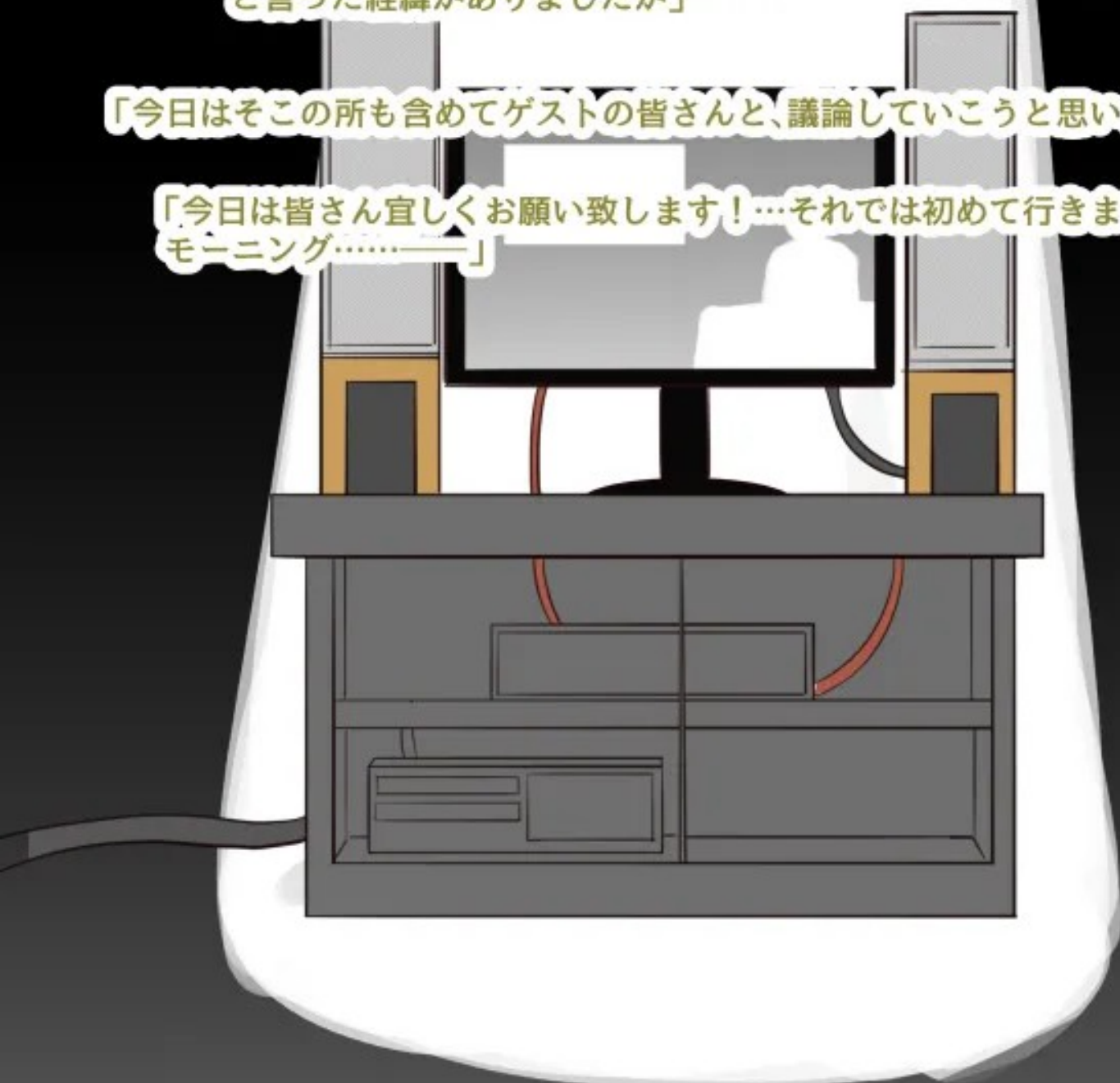
「罪警法(ざいけいほう)の施行日です！はあい。
ここでこの法律について、ちょっとおさらいしてみましょう」

「罰刑務官と呼ばれる刑務執行官が事件になっていないものを独自に捜査し
罰が必要となる場合、執行対象に罰を下すことを知らせ、執行すると言ったもの…」

「はい…この法律を制定するにあたり、相当もめにもめると
言った経緯がありました」

「今日はその所も含めてゲストの皆さんと、議論していこうと思います！」

「今日は皆さん宜しくお願い致します！…それでは初めて行きましょう
モーニング……—」



夕暮れ時—
とある学校の裏庭

女子「んん〜っ!!!」

この学校の女子生徒が
半裸にされて木から吊るされている
それだけではなく
キメ細かく、張りのある柔肌には、
卑猥な文字が書かれ
秘所には男根を模した極太の張り型が
女生徒の中を小刻みな振動によって
かき回している。

女子「ふいいんんんん!!!!」

女生徒が体をビクツビクツっと
跳ねさせながら、涎と共に
甲高い声を、猿轡をされ
無理矢理開かされた口から溢れさせる
緊縛され、体の自由が効かないのに、縄を肌にくい込ませ
体を震わせ続ける

女子「んっ…んああ…」

黒く長い髪がしなやかに乱れ
艶やかな表面を
夕日の色が照らす
その髪の間隙から深紅の布で
覆われた目元がチラリと見える
瞳は隠されているが
夕暮れに染まっても解るほど
紅葉した頬は
女生徒が性的な快楽を
与えられていることを
十分に示していた



??「ぎやははっはっwww」

縛られた女生徒の声とは別に
複数の笑い声が辺りを震わせた

??「いったいったwwこれで何回目え？」

女子「ふうーんっ！んっんっんーっ！！」

共に興奮した高い声ではあるが
縛られた女生徒の声はくぐもった
悲鳴に近いのに対し
それを眺める複数人の声は
歓喜に満ちていた



ギャルリーダー(以降ギャル)「はあ〜あ…」

ギャル「おい？解ったろ？我慢せずに声出すのは
楽しいんだよっ！」

「それをおめえーは、図書室だから静かにしろだとか
ぬかしやがってよお！！」

「あーしあらが楽しんでんのに邪魔すんじゃねえよっ！！」

取り囲んで居た女生徒達の一人が
吊るされてる女生徒を怒鳴り近づいていく

ギャル「ん〜…まだちょっと解ってねえな…
おら、こうやって叫ぶんだよおっ！！」

吊るされた女生徒の露わになった
大きい乳房、その先にぶっくりと
勃起あがった乳首をギャルが容赦なく
摘まみ上げる

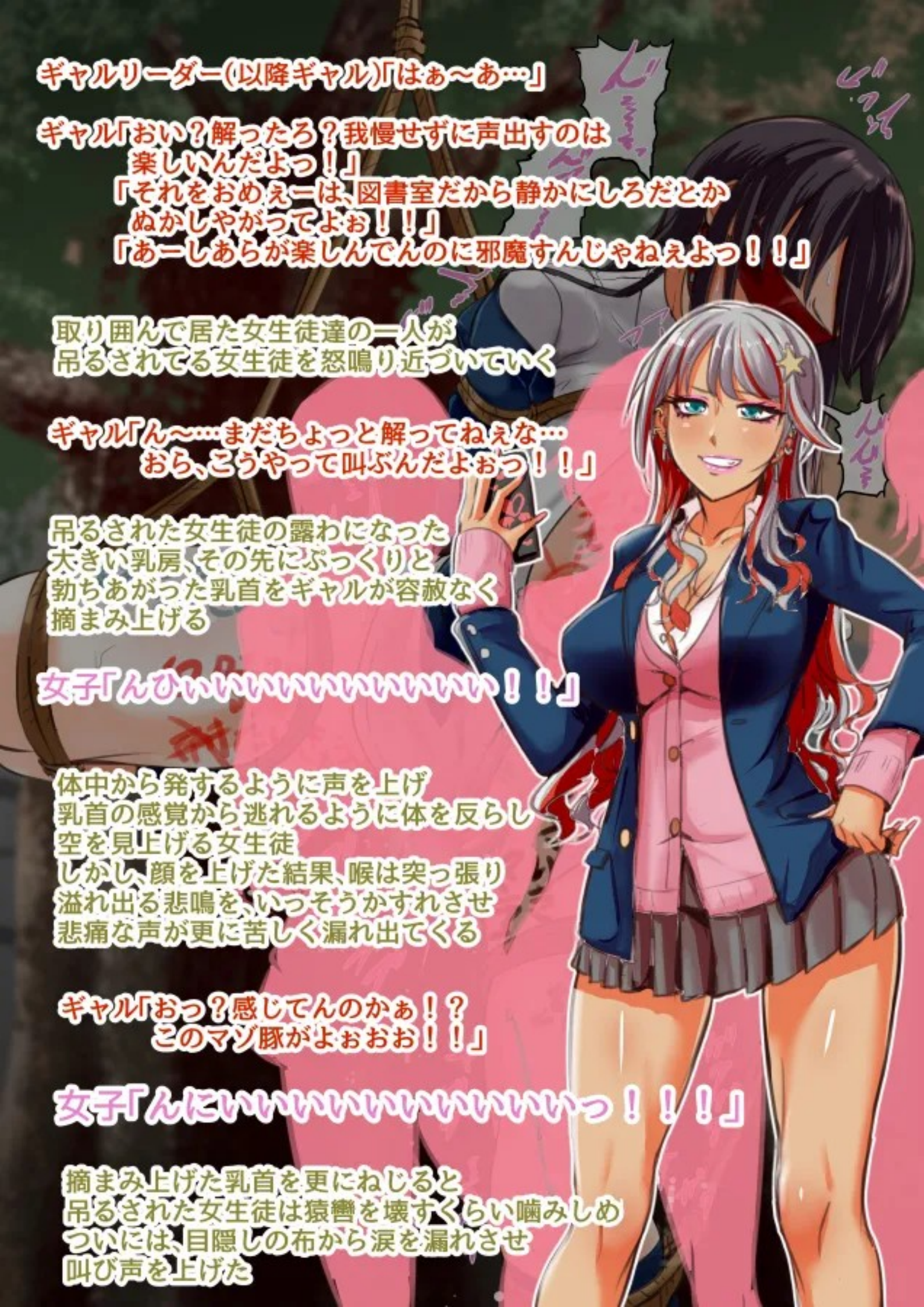
女子「んひひひひひひひひひひ！！」

体中から発するように声を上げ
乳首の感覚から逃れるように体を反らし
空を見上げる女生徒
しかし、顔を上げた結果、喉は突っ張り
溢れ出る悲鳴を、いつそうかすれさせ
悲痛な声が更に苦しく漏れ出してくる

ギャル「おっ？感じてんのかあ！？
このマゾ豚がよおおお！！」

女子「んにひひひひひひひひひひっ！！！！」

摘まみ上げた乳首を更にねじると
吊るされた女生徒は猿轡を壊すくらい噛みしめ
ついには、目隠しの布から涙を漏れさせ
叫び声を上げた



カシヤっ！

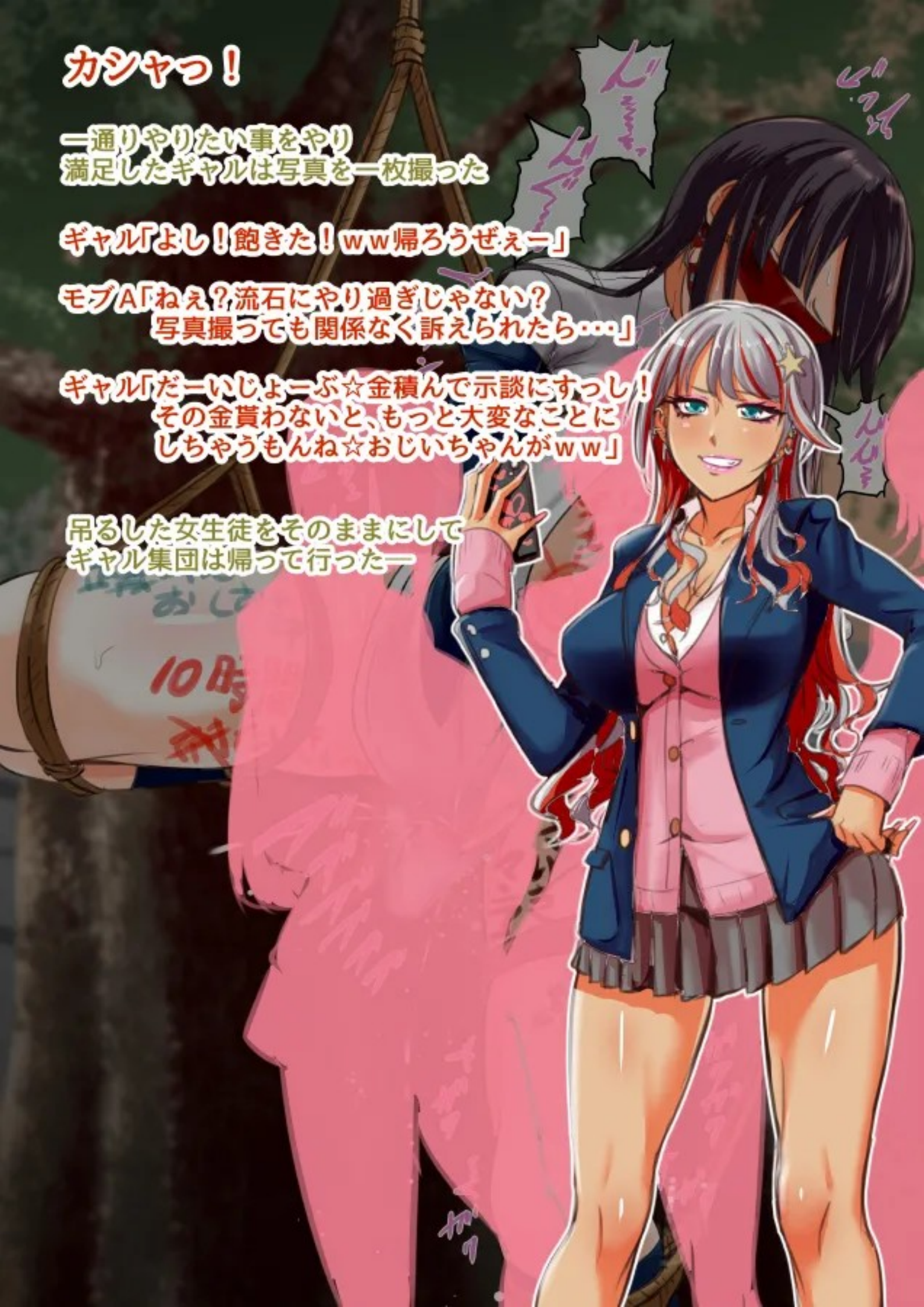
一通りやりたい事をやり
満足したギャルは写真を一枚撮った

ギャル「よし！飽きた！ww帰ろうぜえー」

モブA「ねえ？流石にやり過ぎじゃない？
写真撮っても関係なく訴えられたら…」

ギャル「だーいじょーぶ☆金積んで示談にすっし！
その金貰わないと、もっと大変なことに
しちゃうもんね☆おじいちゃんがww」

吊るした女生徒をそのままにして
ギャル集団は帰って行ったー



女子「ふっ…んん〜…っ」

ギャル集団が去って行ったことには
安堵するが、縛られたままである事実には
絶望するしかなかった
今や裏庭に鳴る音は女子の悶え声と
股間で震える機会の音だけ……

??「情報の確認完了
執行対象確定ね」

女子「っ!?!」

この卑猥な情景に
似合わない落ち着いた
大人の声が混ざる
その声に女生徒は一瞬ビクリとするが
その声が女性の声だと理解すると
羞恥心よりも安心感がまざる
助かると、希望が少女の胸に湧き上がった



??「現場を詳しく保存するわね
もう少しこのままでいて貰う」

女子「んんっ!?!」

スグに助かると思った少女は
お願いでも命令でもない
決定事項を告げる声に困惑した

??「ちゃんと立って
股の間を撮影するから」

カシャっ!カシャっ!カシャっ!

女子「んふっ!ふんんーっ!!」

少女の疲れ切った体を隅々まで
撮影して回る謎の女
シャッター音が響く度に体をよじり
羞恥を乗せた声が「やめて!」と懇願するが
女は表情一つ変えずに撮影をつづけた



仕事を終えた女は初めて自分の正体を明かす

??「ああ、言い忘れていたわ
私は罰刑法の刑務執行官です」

執行官「送られてきた情報と現場での証拠、状況
これらにおいてこの件は
執行事案となった」
「被害者である貴女の告発などに関係なく
執行されることを理解して」

身分を説明すると共に少女の束縛を解き
自由な身になった少女は、涙で濡れた目を
執行官に向け懇願したのだった

女子「お願いっ！何もしないで！！
アイツきつともっと酷いことをする
それに私の…写真…が…」

そこまで言うとは少女は声を止めた…
執行官の目が一ミリたりとも変化が無く
こちらを見ているからだ

執行官「この件に貴女の意見は介在しない」

その場を去っていく執行官を
見ることなく、少女はその場で
へたり込んだまま動かなかった――

夕暮れの帰り道
先程まで一緒に笑って居た仲間達と別れ
家に帰ろうとしていたギャルに
一通のメールが送られてくる

ギャル「ん？何だしこれ？？知らないアドレス…」

特に警戒心もなくメールを開くと—



罰刑法により貴方を執行対象として処理します
以下に執行内容を明示します

刑罰内容：激しい性的な凌辱(公開)

場所：貴方の教室

執行日時：明日20〇〇年●×月〇●日 午前11時

執行への異議、申し開き、又は自首への意思を伝える場合は
以下の場所に来るように(尚、執行前に限る)

ギャル「なんじゃこりゃ?」

政治経済などには全く興味がないギャルは
罰刑法が施行されていることなど知る由もなかった

ギャル「意味わかんね!」

何か面倒な事があれば、今まで通り自分の祖父などの力を
借りれば何もかもが、問題にならずに済んでいたギャルは
何も恐れる事がない無敵の状態だった。故に無視をしたのだった

翌日、メールに書かれていた執行日の当日だったが
ギャルはいつもと同じように仲間と一緒に
教室ではしゃいでいた

モブA「そう言えばアイツ今日来てないね？」

ギャル「?……ああ！アイツねww静かでもいいじゃんww」

「ぎやははははははははwwww」

ギャル達の爆笑声が黒板への筆記音をかき消す
ギャル達には誰一人として関わろうとしない
…教卓に居る教師ですらも——

その調子のままギャル達は
学校生活を過ごしていった

——午前11時
4限目の授業を知らせるチャイムと
同時に教室の扉が開かれる

??「執行対象を確認。これより
罰刑法の下に刑罰を科す」



ギャル「……は？なに？」

流石のギャルも場違い過ぎる異分子に
困惑を隠せなかった
勿論、困惑しているのはギャルだけではない

教室は静かにどよめき出した

執行官「罰刑法刑務執行官として
貴女を執行内容通りに処します」★

教室の空間とは別の空間に
居るかの様な無機質な声で
ギャルに対して声を届かせる

ギャル「え？なに？あーし？？」

執行官「ええそうよ？連絡は受けたでしょ？」

ギャル「連絡？はあ！？なに？」

執行官「貴女の認識はいらない
刑を執行する
連絡の通りこの場で貴女を
凌辱します」

ギャル「凌じよ……犯すってか？」

ギャル「……この私を？犯す？…ふふ」
「ははっ！ははっ！ぎやはははははははっwww」

目の前で自分を犯すと狂気じみた事を言う相手を
一瞬は驚愕して見たギャルだったが
スグに楽しそうに甲高く笑った

ギャル「マジかっ！ウソじゃんっ！！ええ！？
あーしを？凌辱するってえ！？」

「……ざけたことぬかしてんじゃねえぞ
このアマあああっ！！！」

教室中を震わせる怒号を放つ
楽しそうに笑っていた顔は
般若の如く崩れ、体中に
怒りのオーラを纏ったギャル
教室に居た他の生徒はその怒気の波導に
当てられ身を縮ませ、尿を漏らす者も居たが
無理もなく
比較的近い仲である取り巻きすらも
青ざめた顔で動けなくなっている
その空気を纏って執行官に近づくギャル

ギャル「なあ？お前？あーしが誰だか知ってて
んな事言っただよなあ？ああん？」

執行官「対象が誰であろうと関係ない
その対象の血縁がどうだろうともだ」

ギャル「はっ！なる程ね…権力には屈しません
ってか…おめでてえこったぜ…」

「うるあああああっ！！！」

豪風一閃っ
周囲の空気を巻き込み
轟音を携えたギャルの蹴りは見事に
執行官の腹を穿った

執行官「……うつ」

執行官は一步下がり腹を抱え
うつむくが、膝は屈しない

ギャル「へえ～普通今ので子宮ぐちゃぐちゃ
ガキ孕めねえ体にな
るんだけど
あーしに舐めた口効くだけ
はあるじゃん」

ギャル「ヤンチャやるにも
パワーは必要でねえ
ちゃんと鍛えてんだよっ!!」

うつむいている執行官の髪を
掴み顔に膝を入れようとする
ギャル

ガシィィィィっ!!!

ギャル「え?」

しかし髪を掴む前に自分の腕が
執行官によって捕まれた
そして、掴み損ねた髪に変化が現れる

ギャル「え?ちょ…なに?それ?」

ギャルの目の前で紅蓮の炎が吹き上がる
否、赤龍が吐くマグマが如き灼熱色に染まった
執行官の髪があった

ギャル「……っ……っ！！！！？」

捕まれた腕を無言で引き払おうとするギャル
しかし、無理
岩——地中と同化している
巨石を動かそうとしているかのように
動かない、離れない
ギャルの頭は混乱し
言葉を作り出すことはできない
無言で引きはがそうとする——

ギャル「ふんっっ…！んんっ！！」

両手で——

ギャル「はあんっっっんんんうっ！！」

身体全体を倒し、くねらせ
全体重を使って逃れようとするが
摩擦の限界を越え足裏が滑る

ギャル「ハアア…！ハアアアア…！！」

自分の呼吸だけが変わっていく中
執行官の目が溶岩流の中から現れる

ギャル「ああっ！…っ！！…っ！！！！」

「いやあああっ！！」心の底からの声は
ついに口からは出ず
変わりに目前に現れたのは——

腕かと思う程太いイチモツが
執行官の股から出現した

ギャル「にや…んにやんだよお！それはああっ！！？」

女であるハズの執行官から男根が生えた
この素っ頓狂な状況に
ギャルは声を放つ事ができた
あまりにも現実離れし過ぎた光景だったからだ

執行官「執行する」

ギャル「あっ…」

一瞬現実から乖離した意識が
執行官の声で再び自分の重たい身体に戻る
執行官はギャルを自分に引き寄せて
服を剥ぎ取り始める

ギャル「やっ…嘘っ…待って！」

ギャルの身体は身動き一つとれない
異形の力を前に、思考とは別に
心が屈した
巨岩が挟まれ、抵抗する気力すら
失われ、されるがままを受け止めるしか
なかった

執行官「刑罰執行以外の全での意思は
介在しない」

屈してはいるものの羞恥心は
湧き上がってくる
ギャルは瞳を濡らした

ギャル「あつ! あああああつ!!
動かないでええええつ!!

ギャル「うあつ!
痛い痛い! ああああ

モザイク無しは
FANBOXで♥
(300円プラン~)

ギャル「うにいいいいいいいい!!
太いいいい!! さけるうう!!」